

痛恨の戦争へのこだわりも、戦後五十数年を経た今日もういい加減にしたいが、戦争の後遺症はそう簡単に消え去るものではない。しかし、いつまでもくよくよせず、苦しい経験をバネに前向きに、来る二十世紀へ向けて悔いることのない生き方をしたいものである。

(愛媛県 山本 繁夫)

抑留挽歌

愛媛県 平井 一

少年軍属から現地入隊

【執筆者の紹介】
武市氏は同じ市内で私の一年先輩に当たる方で、若い頃グライダー部で三カ年間ロープを曳き、足腰を強めた仲である。ご本人の履歴にもあるとおり、志願して特幹に入り、終戦後の抑留中には体調を崩して生死の境を彷徨したようにお聞きしている。

戦後は愛媛県庁のホープとして県政のために尽力され、私たちの愛媛シベリアを語る会のためには監事として、財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の理事として、今年総会にて再び監事に就任して頂いた。潔癖な性格と公正な生活態度には尊敬いたすところである。

母を亡くした私は、昭和十五年十二月、学校を中退して少年軍属を志願した。全国から十人ぐらい広島港から貨物船で出発、青島に到着、北支山東省の水の都済南に駐留していた第十二軍司令部に赴任。初めは経理部、後に法務部(軍法会議)に筆生、雇員として勤めた。当時、方面軍は北京、第一軍は太原に在った。

昭和十九年の秋、第十二軍は済南に第五十六師団を残して、開封から黄河を渉り、河南省鄭州に移動し作戦を展開していたが、制空権を敵方にとられ、かなり厳しいものになっていた。私は法務部に勤めていたので、見聞する軍律は大変厳しく、前線でも日本軍の犯す犯罪はほとんどないということであった。

昭和二十年の初め、私に徴兵検査の通知葉書が来た。そこで私は済南に戻り、一般人と共に受けたところ第一乙種合格となった。入隊通知は、郷里松山の十二連隊と済南の師団直轄独立歩兵第九大隊と両方から来たが、上司と相談して現地済南の部隊に入隊することとした。

本土では三月、東京の大空襲があったが、そんなことは一切知らされず、四月一日、独立歩兵第九大隊に入隊した。初年兵は一個小隊ぐらいたと思われたが定かに覚えていない。戦況の不利は初年兵教育にも影響して、実弾射撃訓練などは極めて少なく、匍匐訓練や塹壙掘りが多くなった。私的制裁は聞くほど多くはなかった。訓練中出合う部隊の中には、水筒が竹筒であったり革靴が運動靴や地下足袋であった部隊もあり、このような物資の不足は、特攻的な訓練につながった。行進する軍歌も、特攻隊の歌など自爆的なものや「ポーランド回顧」のような哀調のものが多くなっていった。初年兵教育は三カ月で終了した。

本土防衛の転進

昭和二十年七月、「本土危うし！」の情報は現実味を帯びてきて、第五十六師団に転進命令が出た。「東北防衛軍として本土に向かう」というもので、その頃郷里松山など空襲による戦災に遭っていたなど知る由もなかった。

軍装を整えて済南の駅から軍用列車に乗車した。これがシベリア抑留の第一歩とも知らず、喜んで乗車したことを思い出す。訓練や使役もほとんどなく、列車は満州を通過した。ただ、途中の駅で満州の在留邦人の召集兵を見かけたが、まさか自分の部隊にも入隊していたとは。抑留後、ラーゲルで知った。

列車は平壤から東へ向かい、日本海側の北鮮随一の工業都市興南に到着、ここで日本からの輸送船を待つこととなった。船の到着の気配のないまま、食糧品の調達や物の運搬の使役に初年兵らしく一生懸命の日々であった。

ソ連の侵攻

八月九日、「ソ連が満州、北朝鮮で国境を不法侵攻

している」との情報がいち早く伝達され、部隊は本来の任務である師団司令部の警備及び駐留地の防衛のため、興南の隣接地咸興の司令部がある小学校に集結した。

国境付近のソ連の侵攻は、満州のことは伝えられず、「北鮮の清津ではソ連の侵攻部隊を五十六師団隷下の部隊が撃退しているが警戒を厳重にせよ」との情報が幾日か続いた。そして、八月十五日の玉音放送を聞くことになる。

終戦と司令官の殉死

八月十五日の正午前、部隊全員校庭に集合の命令が出た。北鮮国境付近に出動応援に行くのかと命令を待っていると、天皇陛下から重大な放送があるので姿勢を正して聞くようにとの伝達で、壇上にラジオが一台据えられた。司令部のお偉方も列を正し、姿勢を正して私達と向き合う格好であった。

玉音放送は雑音が多くて内容が良く判らなかつたが、日本が降伏した！という囁きが耳には入った。放送が終わった後、司令部の副官と思われる方が壇上に

立ち、玉音放送の意味を伝達し、「戦争に敗れたが、規律を保持し、部隊の統制ある行動をとるように」と涙ながらの声であった。

私はその翌日と記憶しているが、再び校庭に全員集合の命令が出た。中央の壇上に白い幕が張られ、師団長が白装束で立たれた。「敗戦の責任をとり殉死する。全員統制ある行動で、一日も早い日本への帰還を祈る」趣旨のことを言われて自刃された。一瞬の出来事で、乃木大将のことを思い出しながら、師団長の勇気ある決断に驚愕し、反面、これで日本に還れるという安堵感を味わった。

武装解除と抑留前

数日して、待機している時、武装解除の命令が出た。武器は小銃しか貸与されていなかったのので、小銃を持って隊列を組み行進して咸興駅前の広場に到着、班長が一挺ずつ悲しそうに投棄した。見る見る山をなしていったが、部隊が帰り着く頃、黒い煙が激しく立ち上るのを望観した。黒い煙は幾日も続いて、咸興の空を曇らせた。迫撃砲や弾薬等は他の部隊が港の海中

に投棄したと伝え聞いたが、後に、ダイナマイトの原料という茶色の塊を片手いっぱい配られ、砂糖代わりに食えと言われた。船の中でも一度少量配られた。

国が敗れて戦争が終わったが、私達の五十六師団は戦闘に敗れたわけではないので、安易にそのまま日本に帰還出来るものと信じていたし、上官もそう伝達していた。

満州における関東軍の惨敗は想像もしていなかったが、日が経つにつれ、朝鮮出身の兵隊の除隊解放、それに便乗した兵の脱走が噂されるようになり、三十八度線で捕まって逆送される者がソ連兵の監視下に置かれる等、また満州の邦人が徒歩で南下する姿を見られるようになって、満州の日本軍の惨敗の実態も判ってきた。私達は待機場所の校舎校庭以外の外出は禁止されていたので、故郷の話などして時間を過ごしていたが、満州からの逃避行の一団があり、顔に泥を塗り頭は丸坊主の男装の子供連れの母子が汚れた服で痛々しく、校庭の入り口付近堀沿いに何組も座っているのを目にした。ソ連兵の暴行から逃れるため「昼は歩き、

夜は日本の兵隊さんのいる所で休む」とのことであった。ソ連兵に対する強い憎しみを覚えたが、我々も丸腰で護送することも出来ず、乾パンを少し分け与えるのがやっとであった。その後何組も同じような逃避行を見かけたが、想像を絶する苦難の道が無事三十八度線を越えて日本に帰ることが出来たであろうか、と思う。

その頃からジープに乗ってソ連兵が、マンドリン銃を肩に吊り、威嚇射撃をして勝者の傲慢さを露わにした姿を度々見るようになった。またこの時点では威興、興南の在留邦人は残っていたと思うし、我々ももう直ぐ日本からの迎えの船が来ると信じていた。

シベリア抑留地への旅

昭和二十年十月中旬、待望の日本からの帰還船が到着した。「将校を残して兵隊千人優先して帰す」と伝達され、欣喜雀躍として威興の港から乗船した。港では在留邦人が日の丸の旗を振って見送りに来ていたし、船は貨物船で軍馬を積んでいるし、日本人の船員ではなかったが、何の疑いも持たず帰還船と信じてい

た。乗船すると直ぐ飯盒の蓋に生米が配られ、例の砂糖代用品も少量配られた。部隊の世話を誰がしていたか判らないが、下士官がしてくれていたと思う。荒れた日本海の高原を眺めて故郷を偲んでいたが、夜遅くなって星が見えはじめた時、船が北進していると騒ぎ出した。その時船長（ロシア人）からの説明として、「この船は、乗せている馬をウラジオストックに下ろすため北進している。ウラジオに着いたら、その後日本にダモイできる」と安心させた。仮眠していたら、翌朝ウラジオストックの港に船が寄港し、軍馬を十頭ほど下ろした。

この軍馬たちも抑留され、スーチャンの炭坑の地底深く坑道で目隠しされてトロッコを曳かされようとは、この時は夢にも思わなかった。

昼前船が出港し、船首が南を向いて走り出したので、今度こそ日本に帰れると安心して、広くなった船底で仮眠していた。日本までは何日かかるか知らず生米をかじって時を過ごしているうち夜となり暗闇となった。深夜、突如船が着岸した。日本に着くには早

過ぎると思っている時、武装したソ連兵が乗船してきて、下船を命令した。「ダバイ、ダバイ」の怒号と銃を突きつけての脅迫に止むなく全員下船させられた。

この時「しまった、騙されてシベリアに捕虜となった、何たることか」と、まさに晴天の霹靂の出来事であった。ただ、おろおろと下船すると四列縦隊に並べと言う。四列に並ぶと何度も何度も数え直して百人単位とし、監視兵七、八人が付いて徒歩で出発を命じた。軍隊の時の部隊編成もなく、船から降りた者を順次並べさせたので、階級制度のない隊列になってしまった。

日本への帰還船と騙してシベリアに抑留された無念の涙は、忘れない。山の稜線の道なき道を空腹のまま歩いたが、一度休息して仮眠したとき、シベリアの十月の夜の寒さを実感した。監視兵がこの時、わわわれの身につけている時計、万年筆等を強奪したが、拒める状況にはなかった。

二日目の昼頃、山の下の方から「ポー、ポー」という船の汽笛のような音が聞こえ、港に着いたのかと

思ったところ、この音は「炭坑」の正午を知らせる音とわかった。カンボーイ曰く、「下に見える炭坑の町はスーチャンで、君たちの収容される建物は、昔シベリア出兵で日本兵が建てた建物だ」と身振り手振りで教えてくれた。

先着の部隊に合流したが、遅い到着であり、背負つて来た荷物はことごとく没収されてしまった。ラーゲルの周囲は有刺鉄線が何重にも張られ、四隅の望楼には監視兵が終日交代で立っていた。粗末な急拵えの板張りで、窓も天井もなく、出入り口が明かり採りでもあった。木製の二段ベッドには、徴用したのであるう日本製の毛布が一人一枚、半折りにして敷かれていた。暗い部屋、狭い場所、着の身着のまま外套を頭からかぶって、ラーゲルの初日は泥のごとく眠った。

抑留地は、沿海州炭坑の町スーチャン（現在はバルチザンスクと聞く）で、ナホトカから三つ目の駅と後で知ったが、地図を持つ者もなく聞いたことのない地名であった。炭坑は幾つもあり、ラーゲルも幾つかあったと思われるが知らされなかった。盆地の底のよ

うな所の炭坑で、ラーゲルは丘陵地帯の中程にあった。番号も付いていたと思われるが知らされなかった。

抑留挽歌

私は今まで抑留の短歌を数多く歌誌に発表してきたが、その幾首かを追憶し挽歌とする。

銃構へあるひは銃床を振りかざし

強制されたる炭坑労働の日や

炭坑労働は三交代、ラーゲルから炭坑まで往復百人単位で歩くが、初めの頃は粗暴な監視兵が多く、病弱者や路端の冬草を摘む者に銃を構え、銃床を振りかざす手荒な監視であった。日に日に飢餓のため身体が弱っていく隊列は乱れ易く、苦しい行進であった。

年老けし召集兵より^{たぶ}れゆきぬ

墓掘る冬の土固かりき

抑留されて全員階級章は外されていたので初年兵の私には気楽であったし、十九歳の体力は一応人並みに働くことができたが、満州で根こそぎ動員で召集された三十歳以上の人は、体力がなく衰れであった。夜

背中を合わせて互いに体温で暖をとりあっていった先輩が、ある朝眠るように死んでいった。亡くなると、命令で真つ裸にされ、小屋に積まれた。厳寒の中通夜をする者もなく、幾人か死体がたまると四人一組で戸板に乗せて山腹まで運び、カチカチに凍った土を掘った。亡骸がやっと隠れる程度に掘ると土をかけて盛り土をした。勿論、死者の氏名も判らず、墓標とする板片もない。小さな板木を建てて墓標の目印としたが、同じような墓が何十と段をなしていた。私は二度この作業に従事した。

斜坑に脚踏ん張りて石炭掘る手許

スコップ大きく苦しみたりき

炭坑坑内作業、坑道掘削、立坑、斜坑、トロッコ運搬等その日の割り当てによって変わった。幸い私は立坑には入らなかつたが、きつい作業ばかりで、現場監督のロスキの指示に従つた。と言つても彼等も囚人上がりで、スターリンの独裁を快く思つてない人達であつた。砂塵のもうもうと立ち込める斜坑で、掘り出された石炭を下に流すスコップの作業は大変であつ

た。日本人には大き過ぎるのである。

地下二百メートルの坑道には無蓋のエレベーターで下り、ガスランプを先頭に現場に向かった。先年、オウム教団のサリン製造工場の捜索で警察がカナリアの鳥籠やガスランプを掲げているのを見て、シベリアの炭坑を思い出した。

ボタ山に押すトロの雪凍る夜は

日本の雑煮をただに思ひき

必死で肩にトロを押す重み、栄養の足りない身体でよくも頂まで押したものだ、凍る雪の上に座り郷里の雑煮の話を友にしたものである。坑外作業はノルマが厳しく、黒パン減配の時もあつた。

押して挽く鋸にノルマ上がらねば

黒パン半減の罰にも耐へき

豚の如く腫れし時ありき

毛を刈りし羊の如く瘦せし時ありき

ソ連女医の前に素裸の病む身立ち

労働の軽減を乞ひし日ありき

三十八度以上の高熱でなければ休ませてくれない。

寒い室で永く素っ裸で待つて計る体温が、時に三十七度九分の時があった。労働の軽減を乞うと坑外作業に回された。坑木を作るため二人して押し挽く鋸は重く、ノルマなど到底達成出来ない。すると必ず「働かざる者食うべからず」と黒パンを減らされた。腫れたり瘦せたり七変化の身体で耐えた。

ペーチカに雪を溶かしし

空缶の黒き水枕元にい寝し夜々

「ストロイ（止まれ）」と監視兵に服装検査をされる。炭坑帰りの時は震えながら服の下に隠した石炭を下に落とした。ペーチカに焚く石炭である。ラーゲルで水は貴重品、空缶に雪を拾って来て何度も溶かし、寝る時枕元に置いた。真っ黒の水であった。

ある時、ラーゲルの有刺鉄線の下を潜って雪をとっていた友が、望楼の兵に撃たれて死んだ。

壊血の斑点出でしが

冬草の白き芽採りくれし君も亡し

ビタミンC欠乏症の壊血病、脚から腰に斑点が出て下痢が止まらず死んだ友が随分多く出た。私も一時脚

に出たが、友が草の芽の白いのを採ってくれて助かった。蓬は便秘し、アカザは下痢をした。今、畦道に見える野蒜を見ると壊血病の日を思い出す。

硬山がたに混じる石炭を拾い帰り

ペーチカに鱈の骨を焙りき

珍しく鱈などのアムールの河魚が配給されることがあった。二年目の冬であったと記憶している。貴重品としてペーチカでその骨を焙って叩き魚粉とした。米粒の形のない糊飯にふりかけて食べた味は忘れられない。この頃からラーゲルでの死没が減ったが、減少した労働力を補うため、千島列島から抑留されたという兵が約三百人、私達のラーゲルに着いたと聞いた。元気な人達であった。

板壁の凍りて灯もなきラーゲルに

まなこ凝らしてスープ啜りき

元旦の夜配られたスープには親指ほどの馬鈴薯が二つ、そして八日後の私の二十歳の誕生日もスープに小さな馬鈴薯が二つ、暗い部屋でスープを啜った、腹を空かして。

発病から復員

昭和二十二年七月、私は突然高熱を発し倒れた。炭坑か、ラーゲルか、の記憶もない。気付いた時は病院の四人部屋のベッドで、ソ連女医がそばに立っていた。熱は四十度以上あり、「安静にせよ」というだけで、薬の投与もなく、病名も聞かされなかった。噂に聞いていた発疹チフスであろうかと思った。同室の人等は次々死亡し、ベッドは空になって私一人意識朦朧と何日か過ぎた。臨死体験というのであろうか、部屋の片隅に亡き母の幻が現れ、「花園へは行くな、一緒に日本に帰ろう、絶対連れて帰る」と励ましてくれた。

ラーゲルでは度々コンコンさんのお告げという流言で東京ダモイを騙され続けていたが、今度は母の導きだと信じる気持ちでいたところ、急に翌日から熱が引きはじめた。女医も喜び、当分この病室に居よと言いい、ハラショー給与の粥と魚などが出て、痩せ細った身体が次第に回復した。一般病棟に移って、抑留者専門の病院があることを知ったが、同僚と雑談している

時「東京ダモイ、この病院の抑留者全員東京ダモイで直ぐナホトカに移動する」との伝達があった。寝耳に水、半信半疑でいたが、アクチブの兵が来て、ソ連高官の配慮だから革命の歌を歌い続けよ、そうしないとナホトカからまた逆送されるなどと伝達があった。病院船が来るとも言われていた。私は着のまま雑のう一つ下げて、他の入院患者とスーチャンの駅から客車でナホトカに向かった。

軌道の広い、ストーブを据えた客車の窓から夏の日
の射す白樺林や草原、コルホーズを眺めていたが、何
と僅か三つ目の駅が終点ナホトカであった。

強制される革命の歌に

喉はらし声囁らし終日船待ち待ちき

海岸に近い砂浜に天幕が張られ、毎日毎日革命の歌
を歌わされ、声が低い、逆送されるぞ、とハッパをか
けられながら第三、第二、第一の幕舎に移った。列車
で奥地から来るダモイ部隊は、服装も様々、元気な人
達ばかりであったが、革命歌を歌わない部隊は逆送さ
れたと聞いた。

昭和二十二年十月十八日夜、病院船高砂丸に乗船した。タラップを踏みしめた時、何とも言えぬ解放感を味わった。案内されて、船室に入るのかと思つたが船室は固く閉ざされ、廊下と甲板を休憩場所に指定された。ぼろぼろの病人上がりの人達ばかりでは致し方ない諦めたが、少し寂しかった。

二十日未明若狭湾へ入った。船の甲板から見た海岸線の美しき、松の濃い緑はシベリアにない景色であり、日本に還つた喜びで見飽きなかつた。検疫のためか船が舞鶴港の沖にしばらく停泊している時、上陸を待ちきれない一人が薄暗い海へ服のまま飛び込んだ。ダモイを餌に騙され続けた抑留の苦しみを思うとき、その心情に同情したが、反面、気が狂つたのかと心配もした。

そして、間もなく平栈橋に上陸することができたが、大勢の出迎えの中に家族はいなかつた。

ぼろぼろの軍服の日をまぼろしに

立ちて涙ぐむ平栈橋

五十二年振りに、子供らに連れられ、再現された栈

橋に立つことが出来た感慨である。

国敗れ捕はれてシベリアに経し二年

様々にわが生を暗くあらしむ

昭和三十年、肺結核の肋骨七本切除の手術を終えて復職願を出したが保留され、無給休職となつた。シベリア復員の前歴が影響しているのか、と警察寮に落ち込んでいた時の歌である。この歌は後に講談社発行の「昭和萬葉集卷十」に登載された。

帰国後の生活

舞鶴、姫路、善通寺の陸軍病院を経て、同年十二月帰郷。体力回復に母の里に赴いたりしたが、混乱した社会を見て、正義感から愛媛県巡査となる。新居浜の派出所、鑑識等勤務中、肺結核となり三年半療養。復職して身体障害者の警官として努力し、五十八年警視で定年退職した。

趣味の短歌は昭和二十八年からアララギ等に所属して現在まで作歌を続けており、平成七年には歌集「櫻林」を発売している。現在愛媛県歌人クラブ理事、愛媛アララギ編集委員等をしている。

平成八年、松山商業時代からの友人で、愛媛シベリアを語る会会長の山本さんから「シベリア抑留絵画、慰霊墓参写真展」の開催計画に協力して欲しいとの電話依頼あり、実行委員として参加した。同年十二月、前記実行委員会を母体に「愛媛シベリアを語る会」発足に参加、副会長・事務局長の重責を病弱の身で引き受けることとなった。同九年四月定期総会で慰霊碑建立のゴースインが出て、同六月「慰霊碑建立委員会」が発足、山本会長以下役員一丸の募金活動等が行われ、年内建立の目標に向かって汗みどろの活動が行われ、当初計画よりも多い寄付金を集めることが出来た。(財)全国強制抑留者協会の下、平成九年十二月十八日、萬葉苑隣接地に待望の「鎮魂 シベリア抑留者慰霊之碑」完成除幕式を行うことが出来た。完成の時、山本会長が碑を抱いて感激の涙を流した姿は忘れられない。

冬空に吊り上げられし丸き石

慰霊碑の上に坐らむとする

朔風にみ霊一千天翔けて

伊予の慰霊碑に還り来りませ

嗚呼君も五十二年の悲しみを

込めて除幕の碑の綱を引く

現在、愛媛シベリアを語る会副会長・(財)全国強制抑留者協会愛媛県支部副支部長

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十五年一月八日生

現住所 愛媛県松山市

昭和十五年十二月 中国山東省濟南市 北支派遣第

十二軍司令部軍属

二十年四月 第五十六師団直轄独立歩兵第百

九大隊(濟南)に現役入隊

北鮮與南に転進(本土防衛軍として待機)

北鮮咸興にて終戦

入ソ、スーチャン地区

高砂丸にて復員

二十二年十月

(愛媛県 山本 繁夫)